様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４１７９

研究課題名（和文）長野県社会部厚生課長としての原崎秀司の職務内容とホームヘルプ事業化との関連

研究課題名（英文）Relationship between Hideshi HARASAKI's Duties as the Government of Nagano Prefecture and Home Help Services

研究代表者
中嶌　洋（NAKASHIMA, Hiroshi）

中京大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：００５３１８５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、長野県庁職員を勤めた原崎秀司にとって、公務とはどのようなもので、戦後荒廃や生活再建を思案するなかで、それらがのちのホームヘルプ事業化にいかにつながったかを考察することにあった。『長野縣厚生時報』（1940年）、『戸倉町公民館報』（1956年）などの第一次資料を分析し、真理を見出すこと、戦残軍人遺族への配慮、心篤き援護、協同・組織の力などが重視されたことが明確になった。家庭養護婦派遣事業の創設に結びつく糸口を解明すべく、要援護者の適切な選定や新生活運動の展開などを重視した原崎の言説を精査し、その要点の実証的裏づけを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、戦後日本のホームヘルプ事業史研究を原崎秀司を通して一歩前進させるとともに、組織的な支援方法の祖型を精査し、そこにみられる相互扶助や連携・協働を実証的に明らかにし、それを今日の社会福祉現場に実践訓として生かせるところに意義がある。また、人物史研究の視点からも意義深く、有名・無名を問わず、優れた行動や思考を行った人に焦点化し、そこから学び得るものも少なくない。歴史の細部に重要な構造が宿るということを本研究を通じて体感できる。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted to investigate the public service of Hideshi Harasaki, who served as an officer of the Nagano prefectural government, and how it gives suggestions for today's concept of social welfare and pioneering knowledge. To achieve that objective, we analyzed primary sources such as Naganoken Kosei Jiho (1940), Toguramachi Kominkanpo (1956) and relevant secondary sources. Results revealed emphasis on the following: to find out the truth in reality; reflection on defeat after the war led to consideration for war-bereaved families; the importance of not downgrading people as a whole but to upgrade them substantially through the power of cooperation; and becoming a good advisor as a "friend of the heart" while supporting social independence to promote the New Life Movement. This study enabled us to discover concepts of social welfare that are true to the present day, including "sympathy," and "collaboration," which are necessary to meet the needs of people.

研究分野：社会福祉学

キーワード：原崎秀司　家庭養護婦派遣事業　ホームヘルプ事業　長野県社会部厚生課　欧米社会福祉視察研修報告書

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

原崎秀司が、1965 年に「日本の社会福祉を進めた 100 人」（福祉新聞社）に選ばれたことや、死後、勲四等瑞宝章を受章した事実からも、彼が社会福祉界に残した功績の大きさが窺える。加えて、彼が当時、先進的であったホームヘルプ事業に着目しただけではなく、それを体系的に整理し、県の単独事業として組織化し、実践に結びつけたことで、長野県民の生活改善や課題解決に寄与していた点が意義深い。にも拘らず、そのプロセスの解明については、従前の先行研究が十分に及んでいたとは言い難い状況にある。原崎のようなキーパーソンの思想や理念がいかにして県政に影響したのかを解読するためには、彼に関する第一次史料のほか長野県庁や日本赤十字社長野支部などにおける史料収集も必須となる。

２．研究の目的

このように、時勢を見通し、必要な施策を必要な時期に設け、実践するといった原崎の姿勢を読み解くことは、政策決定の思考・哲学を理解する上で重要であり、そこにどのような組織化の工夫や人望の集め方があったのか、あるいはまた、反対意見や逆境をいかにして乗り越えて行ったのかといった生き方や人生訓のヒントを学ぶことにもなり、今後の制度・政策を検討していく上で重要な視点をもたらすことになろう。そこで、本研究では、1950 年代前半の長野県内での原崎の職務内容とホームヘルプ事業化との関係性を原崎及び家庭養護婦派遣事業に関する第一次史料を基に、明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

主な研究方法は、第一次資料を紐解き、同事業化のプロセスを実証的に明らかにすることである。その際、原崎の内面にもアプローチする。これらの遂行には、資料収集と聞き取り調査の両アプローチが必要である。まず、資料収集では①原崎が国連本部に提出した『欧米社会福祉視察研修報告書』の発掘・分析、②長野県社会部厚生課の会議録・関連資料の発掘・分析、③長野県社協理事会に関する会議録・記録物の収集・分析、④ホームヘルプ事業の関連職種に関する資料の収集・分析の 4 つの方法が不可欠である。一方、記録に残らない逸話・エピソードを把握するべく、聞き取り調査を行う。①②では原崎の実子、元職員、現職員を対象とし、③では元理事、現理事、横内浄音の子孫を対象とし、④では県内の寺院、教会、婦人会、団体を対象とする。

４．研究成果

上記課題①については、旧国連図書館（スイス・ジュネーヴ）、国立国会図書館、長野県庁図書室、日本赤十字社長野県支部、長野大学図書館、上田市立図書館、戸倉町図書館、日本社会事業大学図書館、原崎宅などに赴いたものの、『欧米社会福祉視察研修報告書』そのものの発掘は未だに至っていない。継続課題として、スイス、アメリカの新旧国連本部・同図書館などで史料収集をしていきたい。課題②に関しては、『長野県議会議事録』『長野県広報』『厚生年報　昭和 38 年度』『生活相談員取扱事例集（秘）』などを発掘・収集し、その一端を口頭発表・論文投稿により明らかにした。課題③については、『長野県社協ニュース』『長野県社会福祉協議会 50 年のあゆみ』及び県社協関係者への聞き取り調査から、その詳細を探った。但し、議事録・会議録の類は未発見に終わっており、今後の継続課題となる。課題④については、民生委員、家政婦、保健婦、看護婦などに関する基礎的な歴史書を通読できた。また、連携や分断の様相を認識することができたが、さらなる掘り下げに課題が残った。

その他、原崎の県庁勤務時代については、現実のなかに真理を見出すこと、敗戦への省察が戦残軍人遺族への配慮につながったこと、「心篤き援護」として未亡人対策が重視されたこと、全体の切り下げではなく、協同・組織の力による実質的底上げが可能になること、住民たちの民主性・自主性を喚起し、社会福祉を萌え上がらせようと意図したことなどが明確になった。ここから、家庭養護婦派遣事業の創設に結びつく糸口を解明し、要援護者の適切な選定や新生活運動の展開などを重視した原崎の言説を精査し、その要点の実証的裏づけを試みることができた。一方、彼の晩年期に関しては、日本赤十字社長野県支部事務局長としての働きと使命感、生涯問い続けたヒルティの『幸福論』を基盤にした幸福追求、日課であった読書、日誌記入、短歌創作などの日常生活場面を明らかにし、旧来、母子福祉や高齢者福祉分野に尽力することが多いとされた原崎が、障害者福祉分野にも興味・関心をもっていたことを彼の足跡から明確にした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　6　件）

1.中嶌　洋「ホームヘルプ事業の先覚者が受けた文学的・芸術的影響――『潮音』及び『湯の里會』における原崎秀司の思想を中心に」『中京大学現代社会学部紀要』12(2) 、2019 年、71-93 頁【査読無】。

2.中嶌　洋「遺族援護の思案と新生活運動の展望――長野県庁職員時代の原崎秀司の 17 年 3 ヶ月」『社会事業史研究』(54) 、2018 年、127-140 頁【査読有】。

3.中嶌　洋「岡上菊栄の児童養護実践と”ねぐら”構想――児童福祉法成立以前の高知博愛園を事例として」『社会事業史学会第 46 回大会報告要旨・論文集』2018 年、167-179 頁【査読有】。

4.中嶌　洋「小地域福祉活動の促進要因――高知県及び島根県のホームヘルプ事業史を事例として」『高知県立大学紀要 社会福祉学部編』67、2018 年、73-88 頁【査読無】。

5.中嶌　洋「日誌に基づく原崎秀司の人生観――晩年期の思考と苦悩への照射」『社会事業史研究』(52) 、2017 年、95-107 頁【査読有】。
6.中嶌　洋「ホームヘルプ事業史を支えた在宅介護職者に関するオーラル・ヒストリー研究――9 道県の事例分析から導出された実践訓」『介護福祉学』23(2) 、2017 年、145-155 頁【査読有】。

〔学会発表〕（計　7　件）
1.中嶌　洋「昭和 30 年代の地方都市社会福祉協議会会報の特質――『上田社協ニュース』に掲載された『小河滋次郎博士小伝』を事例として」（日本社会福祉学会全国大会（第 66 回）、於 金城学院大学、2018 年 9 月 9 日）
2.中嶌　洋「岡上菊栄の児童養護実践と ” ねぐら ” 構想――児童福祉法成立以前の高知博愛園を事例として」（社会事業史学会全国大会（第 46 回）、於 東洋大学、2018 年 5 月 12 日）
3.中嶌　洋「소지역복지활동의 촉진요인－코치현 및 시마네현의 홈 헬프 사업사를 사례로」（2018 年度韓国社会福祉学会、於 新韓大学、2018 年 4 月 21 日）
4.中嶌　洋「長野県社会部厚生課における『現任訓練』の検討過程分析」（日本社会福祉学会全国大会（第 65 回）、於 首都大学東京、2017 年 10 月 22 日）
5.中嶌　洋「原崎秀司と山崎等――ホームヘルプ事業前史としての『潮音』及び『湯の里會』活動を中心に」（社会事業史学会全国大会（第 45 回）、於 長野大学、2017 年 5 月 13 日）
6.中嶌　洋「厚生事業への合流及び新生活運動の展開」（日本社会福祉学会全国大会（第 64 回）、於 佛教大学、2016 年 9 月 11 日）
7.中嶌　洋「ホームヘルプ事業史を支えた在宅介護職者に関するオーラルヒストリー研究」（日本介護福祉学会全国大会（第 24 回）、於 長野大学、2016 年 9 月 4 日）

〔図書〕（計　3　件）
1.中嶌　洋編著『実習指導必携 プロソーシャルワーク入門』八千代出版、2018 年、総頁数 160 頁［2-15,36-39,44-47,50-55,60-61,80-81,86-87,104-105,121,136-138 頁を担当］。
2.中嶌　洋・竹原厚三郎編著『図解でわかる！地域福祉の理論と実践』小林出版、2017 年、総頁数 234 頁［10-77,111-141,163-185,207-229 頁を担当］。
3.中嶌　洋著『地域福祉・介護福祉の実践知――家庭奉仕員・初期ホームヘルパーの証言』現代書館、2016 年、総頁数 397 頁［全て担当］。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。